

パ°クワタセル(Weekly)【胃】療法

注射薬

投与順序	外観	お薬の名前	お薬のはたらき
1		デキスト+ファモチジン+ポラミン	副作用を予防します。
2		パ°クワタセル注	治療の為のお薬です。

投与スケジュール

薬品名	日数																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
パ°クワタセル注	↓							↓							↓							休						

1週間に1回治療をして 3回治療した後1回お休みします。4週で1コースです。

パクリタール(Weekly)療法【胃】

よく起こる副作用

★アルコール酔い

発生時期 薬剤投与日のみ

症状 ○今回治療で使用した薬剤には、薬剤の性質上、アルコールを多く含む薬剤を使用していますので、投与終了後に酔っぱらったような感覚になることがあります。
○今回の治療に含まれるアルコールの量は、約200mlのビールに相当するとされています。
○お酒の弱い方の中には、体からアルコールが抜けた後に二日酔いのような症状（頭痛や軽い吐き気など）が見られることもあります。
○化学療法をされた後は、車の運転・機械の操縦は避けましょう。

対処法 ○アルコールが抜けるのを促すために、治療後は水分を多めに摂取するようにしましょう。

★骨髄障害

発生時期 薬剤投与日から7～14日後に減少します

症状 骨髄には造血細胞と呼ばれる白血球（細菌などから体を守る）、血小板（出血を止める）、赤血球（酸素を運ぶ）の元になる細胞があり、この造血細胞にお薬が作用して造血細胞に障害を及ぼすことを骨髄抑制（障害）といいます。骨髄抑制が起こると、白血球、血小板、赤血球の数が減少し、その働きも弱くなり、感染症や出血、貧血などの症状があらわれやすくなります。

<代表的な症状>

- 感染症：37.5℃以上の発熱・寒気・ふるえ・のどの痛み など
- 貧血：疲れやすい、めまい、立ちくらみ、動悸、顔色が青白い など
- 出血：紫斑（原因不明のあざ）、歯茎からの出血、鼻血、月経量の増加、血が止まりにくい など

対処法 ○感染対策で最もポイントとなるのは、患者様自身の感染予防のセルフケアと感染の早期発見です。感染症をおこさないように、人ごみを避け、こまめにうがい、手洗いを行いましょう。白血球は一時的に下がっても、その後回復します。
○貧血では症状の自覚のないまま、転んだりして事故を起こす危険もあります。日常生活では十分な休養をとりましょう。また、いきなり動かず、動き始めはゆっくりとするように注意して下さい。
○血が止まりにくくなることがありますので、かみそりや爪きりのような鋭いものを使用する際には注意して下さい。打ち身や切り傷を作るような行為や激しい運動は控えるようにしましょう。歯ブラシも柔らかいものを使いましょう。
○症状に応じて、薬剤の投与や、輸血をする場合があります。

★末梢神経障害

発生時期 治療開始日から数週間後にあらわれることがあります。通常数コース投与後に発現することが多いです。

症状 指先や足のうらがぴりぴりする、感覚がにぶくなる等の症状が起こります。味覚異常などが現れることもあります。

対処法 ○転倒に注意しましょう。熱いものや刃物を扱うときにはけがをしないように十分注意しましょう。
○もしも、車の運転で不安なことが現れた場合は、運転を避けるようにしたほうが良いでしょう。
○症状がひどいときには漢方薬やビタミン剤が処方されることがあります。

頻度は少ないが注意を要する副作用

★過敏症

★過敏症

発生時期 薬剤投与開始直後～1時間以内まで(特に10分以内)

症状 顔のほてり、赤み、じんましん、かゆみ、息苦しさ等の症状が現れます。

対処法 ○治療薬を投与する前に、過敏症を防ぐ点滴を行います。しかし点滴直後や、点滴中に気になる症状が現れた場合には、すぐに看護師に知らせてください。

★関節痛・筋肉痛

発生時期 薬剤投与日～2,3日目位まで、5～6日ほどで回復します。

症状 筋肉や関節が痛くなります。

対処法 痛みがひどくなることは稀ですが、症状がある時はがまんせず、医師、看護師または薬剤師にお知らせください。

★血管外漏出

発生時期 薬剤投与中～3日目位まで

症状 薬剤が血管(静脈)の外に漏れると、注射部位が硬くなったり、腫れて痛みを感じる場合があります。

対処法 ○針を刺している部分に違和感、痛みや腫れなどありましたら、すぐにお知らせください。
○針を刺している腕を動かさないようにしましょう。

その他の副作用

★その他

症状 便秘、下痢、悪心・嘔吐、食欲不振、倦怠感、口内炎、軽度の脱毛、味覚異常など

対処法 ○必要に応じて対症療法を行います。

副作用は薬剤ががん細胞を攻撃するときの一部の正常の細胞にも影響を与えてしまうことにより起こるものです。

もちろん正常な細胞は治療が終わればもとに戻りますし、副作用も少しずつ回復します。

副作用の出かたや、程度は個人によってさまざまであり、副作用の全てが現れるとは限りません。

大事なことは予想される副作用を十分理解し、その対処をすばやく行うことです。そして副作用があらわれた場合はもちろん、それ以外でも気になることがありましたらどんなことでも、主治医や看護師、薬剤師に相談して下さい。

医療法人敬愛会 中頭病院 (薬剤部)

